

平成 30 年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 最優秀賞
(国土交通大臣賞)

「 「判断力」とは 」

鹿児島県 鹿児島市立鹿児島玉龍中学校 2年 ^{いなとみ}稲富 ^{かなと}叶都

平成三十年七月七日、西日本を中心とした豪雨が鹿児島を襲った。僕が住んでいた地域でも雨は強く降っていた。テレビで伝えられてくる各県の大雨の状況が、被害のすごさを物語っていた。被害の状況がニュースで細かく伝えられていたその時だった。

「桜島でも土砂崩れが起こった。」

祖父からの連絡だった。

僕は二年前まで桜島に住んでいた。今も祖父母は桜島に住んでいる。祖父から土砂崩れの起こった場所を聞いて驚いた。

「古里地区」

それは僕が住んでいた東桜島地区の隣の地区だった。わずか一キロしか離れていないその地域で、土砂崩れが起きたというのだ。テレビでの速報で更に驚いた。再び起きた土砂崩れで、近くに住んでいた老夫婦が行方不明になったという情報だった。

僕は慌てて祖父に電話で確認した。祖父は長年地元の消防団に入っていたので、細かな情報を知っていたからだ。

すると、手前で起きた土砂崩れの為に、民家が巻き込まれた現場にたどり着けないという事実だった。桜島の島内は、ほぼ道路一本でつながっている。その為、道路を遮断されると反対側に回って行くしか方法がない。

今回の土砂崩れでは、まさにその最悪の悲劇が起きてしまった。桜島東分遣隊は、土砂崩れの起きた現場から数分の場所にある。しかし手前で起きた土砂崩れの為に、救急車をはじめとする消防車などの緊急車両全てが反対周りで現場に駆け付けなければならなかった。

土砂崩れの中から行方不明の人を探すための重機も同じだった。距離にしたらすぐの場所なのに、遠回りをして現場に駆け付けなければならなかった。地元の消防団や建設会社の人々が夜を徹して救助にあたった。民家を押しつぶす程の大きな岩がいくつもまわりにあり、それを二次災害を防ぎながら慎重に重機で取り除き、夫婦を探すためにスコップででいねいに土砂を取り除いていったそう。僕は祈るような思いでテレビのニュースを見守った。

夜中になっても、以前行方不明の状態は続いていたが、深夜二時過ぎに叔父から連絡が入った。叔父は鹿児島市内に住んでいるが、今も桜島の地元の消防団で活動を続けている。待機していた叔父に入った一報は、

「二人を発見。しかし、心肺停止状態。」

最悪の結果だった。

無事であってほしいというみんなの祈りは通じなかった。僕は悔しさが込みあげてきた。

「もう少し早く避難をしていたら土砂崩れから逃れることができたのではないか。」と。

僕が桜島に住んでいた頃、桜島の噴火警戒レベルが四に引き上げられた事があった。その際にも、避難準備を促す警報が発令された。桜島は、他の地域よりも過疎化と高齢化が進んでいる。高齢者

平成 30 年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 最優秀賞
(国土交通大臣賞)

の人々は、自分たちで簡単に避難することができない。その為、普段から近隣の住民が声をかけ合い避難をする訓練も行っている。

今回の土砂崩れは、避難をする直前の出来事だったと新聞報道で知った。真夏の避難所での生活は大変なものだ。その為、おにぎりを作り、避難準備を進めていた時に起こった悲劇だった。僕は桜島に住んでいた頃から日頃の備えの大切さは実感していた。でも、いざとなると素早く行動することができるか自信がない。

「避難」というのは一瞬の迷いもなく素早く判断することが大切だと、今回の災害から改めて学んだ。

近年、自然災害が多発している日本では、この「判断力」が最も重要だと言える。僕の母校には桜島爆発記念碑がある。この記念碑には「住民は理論に信頼せず、異変を認知する時は、未然に避難の用意、最も完要とす」という一文がある。これは「自分で必要だと思ったら自分で判断し避難をする」という意味である。

「自分で考え行動する。」

今、僕たちに最も必要なことではないだろうか。自分自身の命を守る為にも「判断力」とそれを活かす「行動力」を備えていこうと思う。